

編集室から

今月の表紙写真は、毎年7月に行われる七尾の奉燈祭りです。独特の形をした奉燈は、キリコとも呼ばれ、毎日何処かで練り歩いていると言われるほど、能登一円に数多く受け継がれてきました。

その奉燈祭りですが、近年の人口減少に、震災が輪をかけたようで、引き続き継承できている地域は、いかに少なくなったのでしょうか。

本紙執筆陣のお一人、溝口さんが今年のゴールデンウィークにクルーズ船で、七尾港にお越しになり、青柏祭のデカ山をご覧になられたと今月号で、書かれています。大きな自然災害で被災しても、魂を込められる祭礼があると、人は、元気を取り戻せるようです。被災後に祭礼の復活を強く望む人々の声に、「災害復興の一里塚としての祭礼」という秘められた側面を気づかせてもらいました。

タモリとノーベル賞科学者の山中伸弥氏が出演するNHKの知的探求フロンティアという番組で、日本人を特徴づける遺伝子があり、それは縄文時代に九州・四国を始めとする西日本を襲った破局的災害によって、我々の祖先の細胞に刻まれたと報じられていました。その遺伝子を持つと、より不安を感じる傾向が強くなり、万一に備え、災害を乗り越えようとするそうです。このため、周囲の空気を読む・相手の想いを察するなどの気質となり、それは諸物に神が宿るとする特徴的な信仰、侘び寂びの茶道や絵画、能などの芸能に昇華されているそうです。

また一方で、花見や宴会などでパーッとやるのも、この遺伝子の影響だとか…。そうすると、普段勤勉実直な国民性が、熱烈な祭礼の担い手にもなるという日本人の謎は、縄文時代にまで遡る遺伝子レベルの由来を持つ、深い根っこがあると言えます。（は）



このニュースは、地域計画に携わる若手の技術者の参考となることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2026/07

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2026/07

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

文 月



石川県七尾市にて
by hama

**復興するぞ！
能登・北陸**

医療費の問題について、私見を述べてきました。医療費が増大していくことは、防ぎようがないと思います。では誰が、どの程度を負担すべきなのでしょう。

◎

今となつては夢のような話ですが、一九七三年から約十年のあいだ我が国では七十歳以上の人は医療費が無料でした。高度経済成長で税収が右肩あがりだったのと、まだ高齢者が少なかった為です。その後は徐々に高齢者の負担が増えてゆき、現在では七十〜七十四歳は原則二割で七十五歳以上は原則一割です。そして所得が多い場合には、「現役並み所得者」として負担は三割です。

◎

自由民主党と連立政権を担うことになった日本維新の会は、『医療費負担を年齢に関係なく一律三割に』と主張しています。すぐさま実現することはないでしょうが、時代の流れはここまできたかと少々驚かされました。収入は無い・貯蓄は減る一方・年金に多くは期待できない・今後必要になる費用は読めない・子供はアテにできない……それが高齢者です。当然ですが、加齢と共に病気も増えていきます。現役世代の負担を軽くしようとする狙いは判らなくはないですが、その現役世代もいつかは必ず高齢者になります。

その時に、自分たちが支持した政策のおかげで自らの首を絞める結果になる事は充分に覚悟しておくべきです。一般的に現代の若者は、現時点の高齢者より健康的とは到底思えません。良い傾向は喫煙の減少くらいで、食の乱れとストレスと運動不足はエスレートする一方に見えます。

◎

そもそも国が七割以上を負担する現在の国民皆保険制度が、いつまで続けられるのかという問題にも発展するでしょう。目先の利害にとらわれない議論が必要です。我々医療を行う側は不必要な検査や投薬を避ける事はもちろん、防げる病気には一刻も早く介入して未病を守るという意識を徹底させなければなりません。そして医療を受ける側の方々は、健康は保持増進しなければならないという認識を持っていたいただきたいです。何度も述べてきましたが、不健康で病気になったとしても、現代の医学では高い確率で命は保たれてしまえます。しかし元通りにも戻れません。長く、要介護の時間が続くことになるのです。



【プロフィール】

（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった……。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クヌクしています。



濱の起業塾 八十七『地域経営の視点⑩』

地域への来訪目的と地域住民との関係性について説明する図解を、三十年来、使い続けてきた。図は逆三角形で、一番上の層が観光人口、次いで保養・合宿などの短期滞在人口、さらに下へ向かって、交流人口・関係人口（説明当初は、概念が無かった）・多拠点居住のような長期滞在人口、そして最も基盤に定住人口という層構造になっている。上から下に幅が狭くなっていくのは、参加人数が減少していくからだ。

また、上の二層は、地元の方々と接する機会がほとんど無いが、下へ向かうほど接触時間が長くなるとともに、関係性も深くなっていく。

長年、この図を使って、上層から下層へ順に関係性を深化して頂くことで、旧来住民との軋轢を減らしつつ、移住定住へとつなげていく必要性を説いていた。ただ、ほとんどの自治体で、各層への対応がそれぞれ別組織となっており、統一的な政策的メッセージを発信できていない点が残念である。

本紙執筆陣の一人、白川さんに、この解説を差し上げたところ、暫くして「関係人口は移住予備軍ではなく、人口減少で維持活動が住民だけでは困難となっている既存集落への加勢・支援活動を行う人のことではないか」とのご指摘を頂いた。（一社）しろにしの活動内容を拝見するに、なるほどと共感させて頂いた。その後も考え続けていると、「交流人口は、対話とお楽しみが主。関係人口は、集落との協働が主」であることに気づく。

上二層の観光人口と短期滞在人口は、いずれも参加者の楽しみや個人的な目的が主だから、私益目的となる。一方で、交流人口は、その土地の暮らしや生き方をより深く知りたいという共感系の想い・目的だから、共感性が現れてくる。さらに関係人口は相手先の人々の役に立ちたいという想い・目的が主であるから、共益目的と考えられる。

移住や関係人口に関する社会事業を標榜する際、これらの点も踏まえて検討されることをお勧めしたい。

前回は生成AI活用の4段階について次のように整理した。

- ・効率化・自動化 (Efficiency)
- ・高度化・付加価値化 (Augmentation, Added value)
- ・構造的変革 (Transformation)
- ・共創常態化 (Co-evolution)

そして、どの段階においても人間の知的主体性が極めて重要であると指摘した。生成AIの活用を前提に、人間の特徴や優位性がどこに残されているのかを探り、それを生かし、引き続き豊かで楽しい社会を描いていくことが望ましいと私は思う。その特徴や優位性の一つが知的主体性であり、万が一それを捨て去る未来を選ぶなら、その生命体に巨大な脳を持つ資格はないと考える。例えば豊かな社会が築かれたとしても、知的主体性をなくしたものは人生の楽しみを同時に失ってしまうのではないか。

少なくとも現時点では、AIに知的主体性そのものが代替されることはない。もし、そのようなことが技術的に可能となる未来があるとすれば、私はそれを真のシンギュラリティ1だと考え、恐れる。我々はそれを全力で阻止すべきである。

人間を人間たらしめる知的主体性について論を進めていきたい。結論から言うと、次の4つの主体性が重要な要素だと私は考える。

- (1) 探究主体性 -Inquiry Agency-
- (2) 構築主体性 -Constructive Agency-
- (3) 判断主体性 -Evaluative Agency-
- (4) 意味主体性 -Meaning Agency-

AIの有無に関係なく、主体性とは問い、構造・設計、判断、意味・責任を引き受けることである。生成AIは知的労働の工程を、自動化、加速、統合、共創することで再編するが、知的主体性の核心（問い、構造・設計、判断、意味・責任）は代替できない。少なくとも現時点ではそうだし、未来に至ってもそれをAIに譲るべきではない。

したがって、生成AIの浸透が急速に高まる今、知的主体性の核心を研ぎ澄ませていく必要がさらに高まっている。

今回は知的主体性の4要素について詳しく述べたい。

注1：技術的特異点。人工知能の指数関数的な技術的發展により、人間の知能を大幅に凌駕する時点のこと。

前号では、企業や自治体について人事的な側面から考えてみました。今回は、“地域の人事部”たる弊社が拠点を置く“地域”について、人事的に見てみたいと思います。

かつて当清水地域は、基幹産業である林業の隆盛とともに、昭和30年代には14,000人を超える人々が暮らしていました。しかしその衰退とともに、今では約2,000人にまで人口が減少し過疎化が進んでいます。しかも、少子高齢化が著しい地域であることを考えると、生産年齢人口はすでに1,000人を切っているものと考えられます。つまり、企業で言えば中小企業に分類される規模にまで小さくなっており、地域側のプレーヤーをはじめ、まとめ役となるマネージャー人材も少なくなっています。

役場職員時代にそんなことを考えていると、企業や自治体の組織体系のように、観光や農林業、製造業など地域全体を分野別に分けて考えてみたら？階層別に考えてみたら？…と思うようになりました。移住者を「新入社員」として置き換えてみた場合、地域での暮らし支援(=OJT)として「人材育成」ができていないのかと考えれば、十分ではないことに気づきました。希望をもって移住してみたものの、地域になじめずに帰ってしまう例(=離職)もいくつかあったほどでしたから。

移住に至る前段階、そのプロセスである「採用」面でも同様です。学生が就職活動を始めるとき、希望する企業をはじめその業界についての調査研究を行い、そのうえで企業訪問をしたりインターンを経験したりしてみたいと思います。移住を考えはじめた方も同様に、まずはインターネットでいろいろな市町村を検索し、候補をいくつか絞った段階で、例えば市町村役場の移住担当者を通じて訪問してみることも多いと思います。しかし、本当に自分がその会社、その地域に合っているかどうかは、会社案内やネットに載っている“スペック”、担当者との短い会話だけでは分かりません。その解決策の一つが企業への「インターン」であり、地域への「お試し移住」だと思いますが、当時はまだそのような状況にはありませんでした。

また、当地域は大企業のようなネームバリューもなく、そもそも目に留まることすらほとんどありません。しかも、移住系交流イベントの乱発や移住にかかる支援金という名のバラ撒きが全国各地で繰り返され、移住者の取り合いになっています。しかし、私にはそれが正解のように見えませんでした。行政任せではなく、地域での自発的な動きが人を呼び、またその人が人を呼び「繋がり」の連鎖が必要だと感じていました。そんな“みかんジュース理論”は次号にて。



『相模の国から ～大魔神のたび～ 』 三井オーシャンフジの旅 2026.4.29～5.10 ②
茨城県境町 参与 溝口 久

2日目は終日航海日。船内エステでの極上のマッサージに身を委ねたほか、輪投げ大会やクイズ、伝統工芸の奥深さに触れる輪島塗のプレゼンテーションなど、趣向を凝した多彩なアクティビティに参加して時間を過ごした。

19時半からは、お待ちかねのキャプテン主催のウェルカムパーティー。この日のドレスコードはフォーマルだ。華やかにドレスアップした乗客たちが集うなか、ステージから流れる本格的なジャズの生演奏に耳を傾け、その後はチップのやり取りのないカジュアルなカシノに興じるなど、この夜は更けていった。



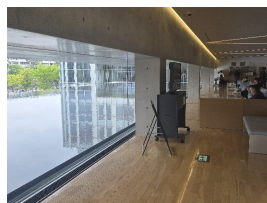
3日目に岩手県宮古市に寄港した。各寄港地にはバスツアーのオプションが用意されているが、今回もこれまでも参加はしない。シャトルバスで向かった磯鶏駅から三陸鉄道に乗り新田老駅で下車。ここには宮古観光文化交流協会の職員が待っていてくれて、さっそく「学ぶ防災ツアー」に出発した。震災当日の津波のことや防潮堤、避難した丘の説明を現地で受けた。

このツアーのハイライトは津波遺産「たろう観光ホテル」の見学だ。ホテル6階にオーナーが避難した時に写し続けた生々しい津波や避難の様子を、その元客室に設置されたモニターで見ることができた。

4日目の北海道松前には、寄港ではなく沖合に船を止め、テnderボートに乗り換えて上陸する予定だったが、波が高く実現できず、終日船の中で過ごすこととなった。

5日目は秋田港に着岸し、チャーターしたタクシーで千秋公園・久保田城を目指した。久保田城は常陸国（茨城県）から国替えとなった初代秋田藩主・佐竹義宣（よしのぶ）によって、1603年に築城が開始された平山城である。公園のさつきはとにかく見事であった。

秋田に来ると必ず寄るところがある。と言ってもまだ2回目だが、「秋田県立美術館」は欠かせない。設計は安藤忠雄。2階にあるラウンジのガラス窓から水盤が広がり、その先に千秋公園の城跡の緑や美しいお堀が水の上に浮かんで見える。風景の切り方は流石、安藤だ。



この日は「藤田嗣治 絵画と写真」展が開かれていたが、このレオナルド・フジタが1937年にわずか15日間で描き上げたという巨大な壁画『秋田の行事』が圧巻だった。高さ3.65m、幅20.5mの画面に、竿燈まつり、かまくら、太平山三吉神社のみよし祭りなど、秋田の四季の祭りや人々の躍動的な暮らしが、凄まじい熱量で1枚に描き出されている。

6日目、5月4日は石川県七尾市。ここで度肝を抜かれた。怪獣と見間違ふほどの巨大な山車が、家並みの向こうに見えたのだ。この日は、国の重要無形民俗文化財およびユネスコ無形文化遺産にも登録されている「青柏祭（せいはいくさい）」の当日だった。市内の3つの町から奉納される3台の巨大な山車、通称「でか山」は、高さ12メートル、重さ約20トン、車輪の直径だけで約2メートルという、木造の曳山としては日本一の大さを誇る。上に向かって大きく広がる形も面白い。上段の舞台には、見事な歌舞伎の名場面を再現した等身大の人形が飾られている。ただ、ゆるりと曳いているだけではない。四つ角の方向転換である「辻廻し」が凄かった。大きな「てこ（丸太）」を前輪に差し込み、男たちの力で前輪を完全に浮かせて回すのだ。この素晴らしい祭りを見ることができたのは、本当にありがたかった。



7日目は終日航海。姿勢と歩行のセミナー、お茶会、商船三井のお話、アフタヌーンティ玉手箱、サンセットストレッチ、ショータイムと、盛りだくさんのメニューに次々と参加していった。

ここで、食事について触れよう。夕食はメインダイニングの「ザ・レストラン 富士」を主に利用した。コース料理で、和食と洋食が日替わりで愉しめる。また、有料・完全予約制のスペシャルダイニング「北斎」でも2回ディナーをした。こちらは三國清三シェフ監修の料理で、フランス伝統料理の技法に日本の調味料やエッセンスを織り交ぜた、独自の「ジャボニゼ」スタイルを体現したコースになっている。「テラスレストラン 八葉（はちよう）」はビュッフェスタイルで、世界各国の多彩な料理が日替わりで並び、朝食はもっぱらこちらでいただいた。ほかにも「プールサイドレストラン&バー湖畔」があり、アルコールも含めてほぼオールインクルーシブである。船での料理に期待外れだった経験は一度もないが、今回も大変美味しくいただいた。

（つづく）